山と博物館

第38巻 第4号 1993年4月25日 大町山岳博物館

特集『梓川』—季節の流れのなかで—穂苅貞雄山岳写真展 4／18～5／9

槍ケ岳と梓川源流 撮影 穂苅貞雄

写真展開催にあたって

穂苅貞雄

「アズサ」、それはさわやかで美しい響きを持った言葉である。梓川はその名前の通りの清流で、槍ケ岳を源流とし、穂高、常念岳などから流れ出る支流と合流して上高地を流れ、大正池にしばし休み、更にいくつかの支流の水を集めて梓湖に注ぎ、その水は発電に利用されている。安曇野に流れ出た梓川は松本市郊外で奈良井川と合流して犀川となる。その距離約七十キロ。

私は子供のころから梓川沿いの道を槍ケ岳へ登り、その後、山小屋を経営するようになったので、梓川との出合いは六十年以上にもなる。その間、梓川の四季折々の美しい姿を眺め続けてきて、いつかその姿を写真集にしたいと思っていた。しかし、最近上高地では上流からの土砂の流入で、川底が上り洪水に見舞われるようになったので、岸に蛇籠が積まれたり、その上流でも治水工事が行われている。下流の梓川でもコンクリートの護岸壁が多くなり、私の求める自然の姿は大変少なくなってしまった。いま梓川の自然を写真に残さないと悔いを千載に残すとの思いで、ここ数年梓川通いをして撮影に取り組んだ。

安曇節の一節に「槍で別れた高瀬と梓、めぐり合うのが押野崎」と唄われているが、私は源流より押野崎の間の、本支流を対象として写真集にすると共に、大町山岳博物館のご好意で梓川の写真展を開催する次第である。本写真展が梓川の自然保護の一助となれば幸いである。ご高覧の上ご批評くださいますようお願いします。

梓川
―季節の流れのなかで―

穂苅貞雄

梓川の流域

日本アルプスの名峰、槍ケ岳を源流とする梓川は、槍沢のU字谷を下り二の俣谷、一の俣谷、横尾谷などの支流の水を合わせて、上高地を横断して大正池にしばし休み、更に狭谷を下り途中いくつかの支流と合流して梓湖にそそぐ。その水は発電に利用され、更に島々谷川、黒川などの水を集めて安曇野に流れ出て、松本市郊外で奈良井川と合流して犀川となる。その距離約七十メートル。その末は信濃川の大河となり日本海に至る。

その流域には、天下の景勝地上高地をはじめ、槍穂高など三千米の高山の大景観がある。

また支流の大野川を遡ると乗鞍高原が開けるなど、他の支流にも多彩な景色が広がっている。

梓川の由来

梓川の名称の由来は、はっきりしないが、その流域に梓の木が沢山あったことから名付けられたのではないだろうか。「アズサ」それはいかにも美しくさわやかな響きを持っているので、人名、地名、JRの特急列車の名前など色々に使われている。アズサは成長すると十米以上もの大木になる。カバノキ科の落葉喬木で粘り強い性質を持っているので、昔は梓弓として使用されたというが、現在は家具などの材料として利用されている。ミズメとも言い、またヨグソミネバリとも言う。

昔の梓川

私の父は大正年代より槍ケ岳で山小屋を経営していたので、私は小学校の低学年の頃より梓川沿いの道を遡り槍ガ岳へ登った。その後父の跡を継ぎ山小屋を経営するようになったので、梓川との出合いは六十年以上にもなり、その色々の姿を眺め続けてきた。

昔のバス道路は梓川の川岸すれすれの低い所を走っていたので、車中から梓川渓谷が手に取るように眺められた。しかし道路は狭く舗装もされていなかったので、雨が降るとよく不通になった。途中には雷岩、百間長屋、天然開峡などの名所があったが、今日では電源開発工事により昔のバス道路の大半はダム湖に水没し、現在の道は数多くのトンネルを通過するので、残念ながら途中の景色はあまり眺められなくなった。昔の大正池は満々と水を湛え、その中に枯木が林立していた。また河童橋の下は川底が深く、大岩に水が砕け散っていた。

大正池

梓川の変遷

梓川は太古以来いくたびの変遷を経て今日の姿となったのである。

梓川の源流には、氷河の時代、槍沢、天狗原、南岳、涸沢などいくつかのカール群がつくられ、氷河の流れた槍沢にはU字谷ができ、横尾で本谷の氷河と合流して、それが上高地まで続いたという。そして当時の梓川は上高地から岐阜県側の高原川に流れて、神通川に入り富山湾へ注いでいたとの説がある。それは焼岳の噴火により多量の火山灰、溶岩をふき出して、梓川をせき止めてしまったので、上高地のU字谷が上流から流入する土砂により埋められて、今日のような上高地ができたといわれる。

その後梓川は狭谷を中の湯方面へ流れてV字谷をつくり、現在のような川筋となった。

このことはまだ十分に実証されていないが、やがて専門家により解明されよう。とにかく長い年月を経て現在の梓川ができたことは間違いない。

昔の梓川流域には現在と比べものにならない程の美林が生い茂っていた。江戸時代の寛文年間（一六六一～）より、上高地一帯では松本藩による森林伐採が行われて、太平衛平より上流の二の俣附近までの流域に、常時十二個所もの杣小屋が設置され、多い時は二百五十人以上もの杣人が、春から秋まで伐採に従事し切り出されたは材は、冬の来る前に梓川の流水を利用して松本郊外まで運び出されていた。それは薪、屋根板用の榑木（くれき）であったが時には川を荒らしたり、附近の風景に悪影響を及ぼしたこともあったと思われる。

また江戸末期には、槍ケ岳の初登攀（はん）をなし遂げた播隆上人が、梓川沿いに槍沢登山道を切り開いた。彼は文政九年の槍ガ岳の偵察登山以来五回にわたり槍ガ岳に登っている。当時二の俣附近までは杣道が通じていたが、その上流は人跡未踏であった。森林を切り倒して進み、或時は川を渡渉するなど幾多の苦難

斜光

冬の焼岳

の末槍ケ岳登頂に成功し、その頂上に三体の仏像を安置し、後には槍の岩壁に鉄鎖をかけた。そして各地から槍ケ岳念仏講の人々が槍へ登るようになったのである。

またその頃、明神池畔の穂高神社奥社へ参詣する人々もあったので、江戸時代既に上高地の梓川流域にかなりの人が入っていたのである。

更に文政三年頃より、安曇郡岩岡村の庄屋伴次郎や、播隆を槍ケ岳へ案内した小倉村の又重郎等が主謀者となり、信州と飛騨を結ぶ最短の道、飛騨新道の開拓が行われて、明神の下流に与九郎大橋がかけられた。上高地最初の橋である。

明治年代になると、新政府に雇われた外国人技師、学者達が梓川流域の山をめざした。特にイギリス人のキリスト教宣教師のウォルター・ウエストンは日本人に大きな影響を与えた。彼は明治二十五年、当時日本第二の高山であった槍ケ岳登頂に成功し、その後各地の山へ登り、ロンドンで「日本アルプスの登山と探険」を出版して、日本アルプスを世界に紹介した。

日本人では明治三十五年、小島烏水がその友人等と槍ガ岳へ登り、その後偶然の機会からウエストンの著書に出合い、彼らとウエストンとの親交がはじまり、ウエストンのすすめで日本山岳会が誕生することになった。それ以来日本の近代登山は隆盛の一途をたどるようになった。作家、画家達が上高地はじめ梓川流域の山へも登り、山岳や梓川の美観を世に紹介したのである。梓川の清流は今も昔と変りなく四季折折に美しい姿を見せているので、上高地をはじめその流域へ訪れる人は数え切れない程多い。

梓川の四季

早春の安曇野の川岸にまず登場するのは、ネコヤナギの銀色の芽である。陽気が春めくと、桜、山吹などいろいろの花が咲き一度に華やかになる。山の春は五月。槍穂高はまだ冬の姿だが、川岸のニリンソウが咲く頃、カラマツの薄緑の芽ぶきがはじまり、白いコナシの花が咲き、ケショウヤナギの綿毛がそよ風に誘われて雪解川の上を飛んで行く。やがて木々の新緑が萌え、シャクナゲの花の咲く頃梅雨に入る。そして梅雨の末期になると大雨が降り洪水となることがある。数年前のこと、連日の大雨で梓川は川一面に茶色の水があふれて、上流から大きい石が押し流されてぶつかり合い、すさまじい音を立てていた。夜になると、それは暗闇の中でパチパチ火花を散らし、まるで地獄を見るような恐しい川となった。そんな思い出もあるが上流の槍穂高が岩山であるので一度に水が出るが、またすぐ水が引き元の清流に戻るのである。

夏が来ると源流地帯の高山植物が咲き乱れ雪渓の雪解け水が音を立てて流れ出す。下流の河童橋の上には老若男女があふれんばかりに群がり、雄大な穂高岳や梓川の清流に見とれている。しかし山の夏は短く九月に入ると、何時の間にか秋めいて高い所では、赤黄色の木々が目立ちはじめ、九月末には源流地帯のナナカマド、ダケカンバの、絢爛豪華な紅葉が山を彩り草もみじがはじまる。そしてカラマツの黄葉が秋の終末を告げ、その枯葉がパラパラと梓川に舞う頃には、槍穂高連峰に白雪が覆う。紅葉は下流に移り安曇野はその最盛期を迎える。やがて雪線が下りて上高地にも雪がきて、日毎に寒気を増し白一色の銀世界の中に川の流れは細くなるが、川霧が立ちこめたり川岸の樹林に霧氷ができ冬は川を幻想的にさえしてくれる。ある年の二月、上高地に撮影に入った日の夕刻、梓川下流よりかすかに風のうなり声が聞こえたと思う間に、ゴーという轟音と共に、あたり一面に雪煙をまき上げて上流へ吹きぬけて行った。それは広野を雪煙を上げて走り行く列車に似ているので、ある上高地の住人は、このドラマチックな光景を風雪列車といった。それは今も目に焼きついて忘れられない。

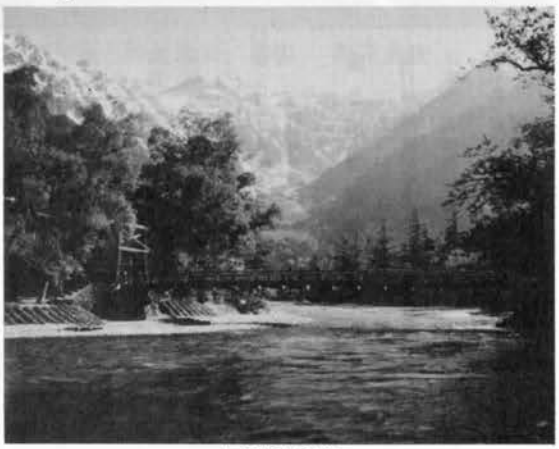
梓川源流

梓川の保護

一昔前の梓川の自然は豊かであったが、最近の上高地では上流からの土砂の流入により、川底が上がりたびたび洪水に見舞われるようになったので、川岸に蛇篭が積まれ、また大正池も土砂で埋まり年々小さくなり、池とは名ばかりになってしまった。下流の安曇野の梓川もコンクリートの護岸壁がやたらに多くなり、人為的に川の流れを変えたりしているので、ムシトリナデシコや、月見草などの群落が少くなってしまった。最近では小さい支流でも工事が行われて自然の姿は少くなっている。そして川原の林の中に、テレビ、自転車などが捨てられていたり、川の中にも空ビン、空缶などゴミが投げ捨てられている。昔のことはいざ知らずとも、今も川をゴミ捨場にしている不心得者がいることは残念である。

川はこれまで人間の生命と暮らしを守ってきた大切なものであると共に、その美しい姿で私達の心を豊かにしてきた。貴い自然を残すため、今こそ効率優先の治水工事を見直すべき時でないか、川岸の樹木を保護し、その傾斜地に柳など木を植えたり、護岸に蛇篭などを利用するなど、また生態系に配慮してできる限り自然を残すような工法を進めて貰いたいものである。梓川源流や小さい支流にはまだ太古のままの自然が残されている。私達は残り少い自然を大切にすると共に、人間の英知を以って梓川の自然を豊かにして、後世に伝えていかねばならないと思うのである。

日本山岳写真協会会員
槍岳山荘・槍沢ロッヂ
雷鳥ヒュッテ経営
松本市在住



河童橋と穂高

北安曇郡白馬村でガロアムシを採集

宮田　渡

昨年の秋に白馬村猿倉付近において、ガロアムシを採集したので記録しておきたい。

記録

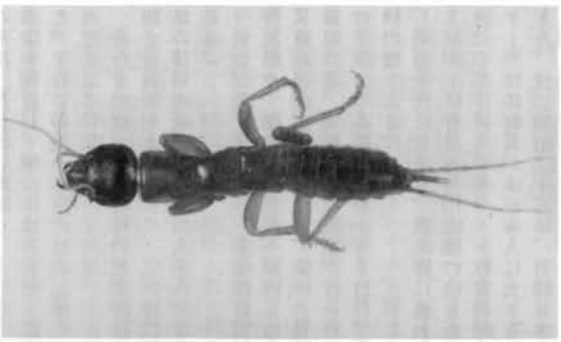
種名　*Galloisiana nipponensis* (Caudell et King)　ガロアムシ
産地　長野県北安曇郡白馬村猿倉付近
採集個体数　1♀　体長二〇ミリメートル
採集年月日　一九九二年一〇月八日
採集者　宮田　渡

ガロアムシはガロアムシ目、ガロアムシ科の直翅系昆虫である。最初、フランスの外交官のガロア(E. Gallois)という人が、日光中禅寺で採集したことからガロアムシの和名がつけられたのだという。直翅系昆虫であるが翅がない。筆者が初めてこの昆虫を見たのは軽井沢町の白糸の滝付近の山中である。石を起すと、一見シロアリを思わせる虫が難なく採集できた。実は白っぽいのはすべて幼虫であった。このガロアムシ多産地はナス科のハシリドコロ*Scopolia japonica* Maxim. の産地でもあった。成虫は体長が二〇ミリ前後で淡黄褐色をしている。石を起すとすばやく土の中にもぐろうとする。明るいときに地表面を歩きまわることはないので、人の目につきにくい。複眼は退化的であるが、地中の小昆虫を巧みに捕えて食べる肉食性昆虫である。

ガロアムシの成育環境は、白馬村ではコケのついた石のある湿った北向きの斜面で、標高が一二〇〇メートル付近である。ガロアムシは年平均気温が摂氏12度以下のところを好むといわれている。また25度以上になると死ぬというから飼育は難しい。

ガロアムシの仲間は長野県に三種類分布していることが分っている。すなわち、ガロアムシ、ヒメガロアムシ、オオガロアムシの三種である。これらを総称してガロアムシ類という。ガロアムシ類は、胸部筋肉の配列、消化管や心臓の構造などが原始的であることから「生きている化石」と呼ぶ人もいる。

未筆ながら、種の同定でお世話になった安藤裕・長島孝行両先生に深謝する。



白馬村産ガロアムシ　雌

尾端には長い尾毛(尾肢)と産卵管を備える

文献
Asahina, S. (1959) Descriptions of two new Gryllobhattidae from Japan. Kontyu, 27:249-252.
朝比奈正二郎（一九七一）ガロアムシ類「動物系統分類学、七(下B)、一九五―二〇四
山崎柄根（一九九二）ガロアムシは氷河期の生き残り、週間朝日百科74

（山岳博物館嘱託員）

博物館だより

4月と5月の特別展等のご案内

○「梓川」―季節の流れのなかで―
4月18日(日)～5月9日(日)　教室・講堂で
穂苅貞雄先生の撮影されました、槍ケ岳、梓川の新作61点を一堂に展示。
自然の厳しさ、美しさをカメラという目で見事に捕らえている作品を是非ご鑑賞下さい。
（入場通常料金）

○動物写生画会
5月5日(祝)雨天の場合は5月9日(日)
山岳博物館付属園で、大町市内の保育・幼稚園児と小中学生を対象。
優秀作品は、中部地方動物園水族館写生コンクールに出品します。
（参加無料）

○春の草花と山菜展
5月22日(土)～5月25日(火)　講堂で
春の野草・山菜の鉢植え、生け花などを展示。
（入場無料）

平成5年度その他の企画展予定

○大町美術会展　5/6(日)～5/13(日)
（教室・講堂・入場無料）

○動物写生画展　6/26(土)～7/4(日)
（講堂・入場無料）

○斉藤清展　7/18(日)～8/22(日)
（ホール・特別展示室等・通常料金）

○秋の草花とキノコ展　9/24(金)～9/26(日)
（講堂・入場無料）

○黒部渓谷の歴史と自然展　10/10(祝)～10/13(日)
（ホール・特別展示室等・通常料金）

人事異動

4月1日付で降旗ちとせ主任が民生部福祉事務所児童館へ転出、福井まきよ主任が総務部税務課資産税係から当館へ転入いたしました。また4月5日付で臨時職員として北沢栄子さんが勤務しました。

友の会だより

平成5年度主な行事予定

○姫川源流と居谷里湿原自然観察会　4月25日
○春の写生大会　5月5日
○小鳥の声を聞く会　5月8・9日
○小谷温泉周辺自然観察会　6月20日
○長野・小布施博物館めぐり　7月11日
○キノコ学習会　9月26日
○黒部下廊下　10月中旬
○黒部渓谷探勝会　10月16日
○こね鉢作りとそば打ち講習会　11月14日
○歩くスキーの会　2月6日

詳しくは博物館内友の会事務局へ。

山と博物館第38巻第4号
一九九三年四月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　TEL(22)〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野四―一三二九三)